

ご長寿おめでとうございます

## 栗林タツエさんが満100歳に

2月20日に満100歳の誕生日を迎えられた栗林タツエさん(東高方町)に長寿祝い金を贈呈しました。

栗林さんは、旧六郷町の建具屋の一人娘として生まれ、大事に育てられました。若いころは洋裁に憧れて、東京の専門学校に入りましたが、戦争のため途中で帰郷することになりました。手がとても器用で洋裁だけではなく和裁も得意だったそうです。結婚後は、子ども2人に恵まれました。3人のお孫さんにはとても優しいおばあちゃんとのことです。

若いころから病弱でよく病院通いをしていたそうですが、ご家族は「頑張って100歳を迎えてくれたことがとても嬉しいです。施設職員の皆さんから丁寧なお世話をいただき感謝しています。これからも長生きしてもらいたいです」とおっしゃっていました。これからも元気で過ごしてください。



### JAL×美郷連携事業

## JAL空育® —折り紙ヒコーキ教室—

「JAL空育®—折り紙ヒコーキ教室—」が2月22日に美郷町総合体育館リリオスで開催され、町内各こども園の5歳児合わせて105名が参加しました。教室では、折り紙ヒコーキ認定指導員の資格をもつJALの職員が折り方や飛ばし方を教えました。紙ヒコーキを完成させた園児たちは、フラフープの穴に飛ばして入れるゲームや、友達とどちらが遠くまで飛ばすかを競うなど、目を輝かせながら紙ヒコーキを飛ばしていました。



■宮崎 清氏

### 大田区と美郷町、麦わらと稲わら

## 第6回「わらの文化」交流の集い

第6回「わらの文化」交流の集いが、3月2日に美郷町屋内スポーツ館で開催され、県内外から118名が参加しました。

当日は、午前と午後の2部構成で行われ、第1部では千葉大学名誉教授の宮崎清氏による「さてさて、次はどんな集いにしましょうか…」と題した基調講演のほか、友好都市の東京都大田区の学芸員である乾賢太郎氏や町学芸員による活動紹介が行われ、それぞれにおけるわら細工の歴史や文化継承の取り組みについて話しました。

第2部では、大田区の学芸員である小室綾氏が講師を務める、麦わら張り細工ポストカードづくり体験が行われました。参加者は小室氏に教わりながら、思い思いにポストカードを作成しました。

### いつまでも“いきいき”元気に

## 美郷いきいき大学

今年度最後の「美郷いきいき大学」が、3月7日に美郷町公民館で開催されました。当日は、元自治体職員の経験を生かし、お金にまつわる漫談を各地で披露している、人星亭まさる氏が「じゃんこ漫談」と題して「お金の貯まる人、貯まらない人」「おじいちゃんとおばあちゃん」のお話をしました。

漫談後、閉講式で修了証書等の授与が行われ、年間を通じて継続的に学び、通算100単位を習得された菊田キエさん(石神)に「ダイヤモンド・ドクター」の称号が授与されました。美郷町民で初めて与えられる称号になります。おめでとうございます。



■菊田 キエさん

MISATOPICS

## 町の話



# 4月1日から美郷町役場の電話保留音・防災行政無線の夕方の時報が変わります

## 電話保留音

4月1日(月)から、美郷町役場の電話保留音が、吹奏楽演奏の「美郷町民歌」から、フルート演奏、ピアノ伴奏による「美郷町民歌」に変わります。

## 防災行政無線

4月1日(月)から、防災行政無線から流れる午後6時の時報が「ウエストミスターの鐘」からフルート演奏による「故郷(ふるさと)」へ変わります。(正午の時報は変更ありません)。



問●【電話保留音について】町総務課 秘書広報班 ☎0187(84)1111  
【防災行政無線について】町住民生活課 環境安全班 ☎0187(84)4903

## 『ふるさと』意識

COLUMN  
WINDS

コラム

風

美郷町長  
松田知己

2月末、庭に福寿草が咲いているのを見つけました。「春だな」と思っていたら今度は連日降雪。でも福寿草は健気に花を維持していました。そんな経過のあと、町は合併満20年を迎える年度に入ります。福寿草のしなやかさを手本にがんばっていききたいものです。

さて、春になりますとアスファルト脇の道端では、日差しに温められた土がほのかに香りを発します。その香りをどう感じるか人それぞれですが、私は春の息吹として好ましく感じます。きつと幼い頃から雪解けとともに外遊びをし、知らず土の香りに触れていたからです。その記憶が私の感性の礎になつていることを思うと、幼い頃の記憶は些細なことも大切であることを、改めて実感いたします。

申すまでもありませんが、人の価値観はそれぞれの経験と記憶により形成されていきます。そしてそれは、否応なく与えられるものと自ら選択して得るものに大別されると思います。例えば義務教育での経験は、基本的に否応なく与えられるもので、全員が共有する経験と記憶になります。一方、個人として参加する行事やイベントなどは、個人あるいは一部の人がしか持たない経験と記憶になります。

そうした認識のもと、町では立町以来、できるだけ人が集う行事やイベントの開催に取り組んできました。ひとえに多くの町民が集い、経験と記憶を共有することでワンチーム美郷の一体感を徐々に醸成していきたいからです。その結果、一定の形はできてきたと私は総括しておりますが、この春、こうした想いの取り組みをさらにも

一つ重ねます。否応なしに全員が共有する範疇の取り組みです。

4月1日より、防災行政無線の時報のうち夕方の時報を、唱歌「故郷」のメロディーに変更します。演奏は、町産業大使でフルート奏者の(株)龍角散社長 藤井隆太氏です。選曲の理由は、耳にする音楽の概念を通じ、ふるさと意識をさらに強く持っていただきたいためです。特に子供たちには、「故郷」を聴くと家庭生活や町の出来事などを思い出す、記憶の入口になつてもらいたいと願っております。

歌詞の出だしの「兎追いし」を、幼少期は「兎美味し」と思っていた私。うさぎ肉は実際に美味しいのですが、その時の恥ずかしい記憶も実は思い出します。しかしまあ、ここは畑屋うさぎの里。畑屋うさぎの振興に繋がるかも知れない期待を込めて、切り替えます。



▲第6回「わらの文化」交流の集いであいさつをする松田町長